

白山ふるさと文学賞

第十一回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生 小説の部 優秀賞

「真友」

松任中学校二年 北野 心結

これは、とある中学校の日常の、ほんの一部を切り取った物語である。

「ごめんなさい。」

今日で何回目だろうか。桜の花びらが舞う中、いつもの決まったセリフを呆れながら言い放つ。しかも、相手のことは数回しか見たことがない。私のことをよく知りもしないくせに、なぜ告白なんかできるのだろうか。そんな贅沢な疑問を抱えながら、昼休み、一人の女子は廊下を歩いていった。

紹介遅れました。私は一ノ瀬羅々。38H。別名、『人類最高傑作』。くつきり二重の大きな目に、鼻筋が通った鼻、薄い唇。しゅつとした輪郭で、サラサラロングの髪。スタイルはモデル顔負け。いつも笑顔で、誰もが憧れる存在・・・なーんて真つ赤なウソ！容姿だけは認めるけどね。いつも周りに合わせて営業スマイル。特技は空気を読むことと、察すること。容姿がいいからって仲良きそうにしてくるのも全部丸見え。誰も私の中身を知ろうとしない。腹立たしいけど、それがすべて分かっってしまうからこそ心が痛い。こんな特技、絶対いらない。でも、合わせて生きるのとはとても楽。だけど、何かが足りないし、幸せじゃないんだよなあ・・・。

廊下はまるでスクランブル交差点かのように人で溢れかえっていた。やつとの思いで教室に着くと、そこにはぼつんと本を読んでいる女子がいた。野口美子、クラスメイト。なぜか目に付く存在。でも、もさつとしていて暗い美子とは話す機会なんてほとんどない。そんな美子の横を通り過ぎて席に着いた。偽りの自分を演じるのはもう嫌。言葉に出せないかわりに、私ははあーと深いため息をついた。

私は、野口、美子。この名前が大っ嫌い。美しいに、子。なんでこんな名前を付けたのだろう。これが私の永遠の疑問になりそうだ。名前とはかけ離れた容姿に内気な性格。芯はある方だとは思うけど、こんな見た目だから授業で手すら挙げられないし、言いたいことも言え

ない。友達なんて言うまでもない。唯一の友達は本と花。本の世界だけが自由。本当は主人公に憧れているだけかもだけど。昼は独りで読書、放課後は独りで花の水やり。これが私の日常。でももう独りは慣れたから大丈夫。今日も昼休みは独りで読書。窓から入る暖かい春風が美子の頬を撫でる。ふつと視線を外すと、体育館裏に一ノ瀬羅々がいた。

「あ、また告白。」

耳を澄まさないで聞こえないくらい小さな声で呟いた美子は、羅々から目が離せなかった。桜が本当によく似合っている。一ノ瀬羅々とは、私が密かに憧れている人だ。羅々より美しい人を見たことがない。私は見た目も性格も真逆の羅々と自分を比べて、はあーと静かにため息をついた。

校門から出ると、春なのに夏のような日差しのおかげで、目の前が真つ白になった。やつと目が慣れてくると、目の前の光景に羅々は目を見張った。美子が、あの美子が、花に水をやりながら笑っている。それも、穢れのない、幸せそうな顔で。今まで見た笑顔の中で一番美しいかもしれない。あんな顔もできるじゃんと感じたのと同時に、私にある気持ちが芽生えた。あの子なら、私のことを分かってくれるんじゃないか・・・？と。そんな淡い期待を抱いて、羅々は美子を見つめたまま数秒間立ち止まっていた。

ベッドにダイブして眼を閉じ、さっきの美子の顔を少しずつ蘇らせる。私には絶対できない。私の笑顔は作った笑顔、美子の笑顔は心からの笑顔だった。雰囲気から違う。羅々は少し照れながらも、本当の気持ちを口にした。

「友達に、なりたい。」

次の日。放課後。迷わず花壇に向かった。そして美子を見つけると、はつきりと言った。

「私と友達になってください！」

辺りが静まり返る。恐る恐る美子を見ると、美子は固まっていた。そして、合唱でいうソプラノよりも高い声で、美子は言った。

「は、はい。私で良ければ……！」

ぶっ！私は思わず吹き出した。嬉しさと面白さが混ざって変な気持ちになる。美子も私も気が済むまで笑った。多分、今まで一番良い顔をしているだろうな、私。そして、まっすぐ美子を見て、羅々は言った。

「告白みたいになっただけど、これからよろしく！」

「うん。よろしく。」

こうして羅々の初告白は、花の香りに包まれて終わった。

帰り道の記憶は、ない。いつの間にか家に着いていた。自分の部屋に入った途端、美子は膝から崩れ落ちた。私に、友達。しかもあの憧れの一ノ瀬羅々。理由は分からないけど、友達になつてほしいと言われた。ほんの数十分前のことを思い出しただけに、私の頬に何かが流れた。涙、だ。やっぱり。自分に言い聞かせているだけだった。強がっているだけだった。何にも大丈夫じゃないのに。大丈夫なわけがないのに。馬鹿だなあ。泣くと、悪いものがすべて身体から抜けたような気がして、すっきりした。その後美子は睡魔に勝てず、ゆっくりと深い眠りについていった。

それからというもの、羅々と美子はいつも一緒にいるようになった。美子からすればみんなの視線が気になるが、羅々と過ごす時間が楽しすぎて、徐々に気にならなくなっていた。そして、少しずつ美子に変化が起きていた。羅々に容姿のことについて詳しく聞いたことで、可愛くなってきた。それが自信につながっているのか、前よりも断然明るくなっている。そんな美子とは逆に、羅々は少しずつ違和感を覚えていた。美子が羅々の容姿についてしか聞いてこないのだ。シャンプー何使ってるの？とか、なんでそんなにスタイル良いの？とか。さらに、美子がどんどん可愛くなっていく。性格も明るくなつたし、羅々はもろろん嬉しかったのだが、なぜかうまく喜べな

った。こんな自分に嫌気がさす。でも、今までは違つたと、確実に羅々は感じていた。今まではこんなことを気にしたり悩んだりしていない。これは、美子としつかり向き合おうとしているからなのではないか。だからこそ、この思いを美子に言おう、しつかり向き合おうと羅々は決心したのであった。

「美子、私のこと、どう思ってる？」

また恋人っぽくなつてしまった。そんな私のちよつとした後悔には気づかず、美子は言った。

「可愛くて自慢の友達！」

可愛い、か。私は諦めずに、もう一つ踏み込んでみた。

「可愛い、だけ？いつも美子は私の容姿についてしか聞かないよね。もつと、一ノ瀬羅々の中身を知ってほしいのに……！」

「ご、ごめん……。」

あ。美子の顔を見てすぐに分かった。強く言い過ぎた。いつも合わせてきただけの羅々にとつて、本音を伝えるということはとても難しいことであつた。言い方がやっぱり悪かつただろうか。嫌われてしまつただろうか。もうダメだ。謝つてほしいわけじゃない、寂しいだけ。本当はそう言いたいの、どうしても言葉が出ない。出せない。どんな悪い方向ばかりに考えがいつてしまう。自分が惨めすぎて耐えられず、羅々はその場を離れた。涙が溢れ出しそうなのを気づかれないうように、真下を向いて歩く。その時の空は、まるで今の羅々の心の色のような、何色でもない色をしていた。

やつてしまった。私が一番馬鹿だつた。羅々に嫌われた、絶対。羅々と友達になれたことに浮かれて、自分のことだけしか考えていなかった。羅々の気持ちを何も考えられていなかった。羅々についてどれだけ知っているのだろう。誕生日、血液型、将来の夢……何も、知らない。本当に、知らない。こんなことも知らないなんて。自分がどれだけ羅々の外側しか見ていないのかがよく分かる。友達失格だ。最低

過ぎる。どうしよう。友達なんて今までいなかったから、どうすればいいのかわからない。考え込んで十五分、美子は何も思いつかなかった。最終手段、検索、するしかない。美子は先週買った、アプリが全然入っていない iPhone 13 を手に取った。『友達と仲直りする方法』で検索。えっと、一番は素直に謝ること、かあ。そうだよ。嫌われるのが怖いけど、羅々に謝ろう。そして自分の気持ちを言おう。そう決心した美子は何度も言葉を考え直して、言う練習までしていた。

いつもより早めに来て、私は羅々を待った。心臓の音が聞こえる。そんなの聞こえるわけない、本の世界だけ、といつも思っていたのに。

「美子……。」

「あ、羅々。おはよう。」

もう前の私じゃない。変わりたい。昨日の練習なんかどうでもいい。今、羅々に伝えたいことを今、しっかりと言わないと。美子は大きく息を吸った。

「ごめん。私、羅々の外側しか見てなかった。羅々の気持ち、全然考えてなかった。本当にごめん。でも、でも！私は羅々のことを知っていた。一ノ瀬羅々を、知りたい。」

言えた。言いたいことを言えた。もう、羅々に嫌われてもいい。けれど、羅々の反応は違った。

「謝らないといけないのは私の方。美子、本当にごめん。寂しいだけだった。今まで私、皆に合わせていたの。だから誰も本当の私を知らなくて。でも美子にだけは知ってほしかったから、思い切って伝えてみたけど……。不器用なのか。ごめん。こんな私だけど、これからも友達でいてほしいと思います……。」

そう言っただけで羅々は照れくさそうに笑った。羅々のその姿が、今までで一番可愛らしかった。

語尾が小さくなるところも、耳がほんのり赤く染まっているところも。他の人よりも羅々に一歩近づけたと、この瞬間美子は感じた。朝

の何とも言えない空気が漂う教室での、ほんの数分が、二人にとって大切な時間となった。

前よりさらに仲良くなった二人は同じことを思っていた。『毎日が楽しい！』と。ここ数カ月で大きく変わった関係。ぐっと近づいた距離。お互い外側も中身も良い方向に変わっていった。羅々は少しずつ反対意見も言えるようになり、生き生きしている。前も美しかったが、より一層綺麗になつていった。美子はいとうと、別人級だ。髪はサラサラ、肌も綺麗。眼鏡で隠れていた丸い目が、チャームポイントとなっている。授業でも手を挙げられるようになってきて、堂々としている。一番変わったと思うのが、周りの人達だ。羅々は、『いいね、その意見。最近なんか変わった？そっちの方が良いよ！』と、美子は、『最近凄く変わったよね、何かしてるの？可愛いよ！』と言われるのだ。そんなことを初めて言われた二人は、少し戸惑いながらも、内心嬉しさでいっぱいだった。これも、すべて羅々・美子のおかげ、ちよつとの勇気を振り絞って本当に良かったと、心からそう思う二人なのである。まるで二人を祝福・応援するかのよう、空には薄っすらと虹が架かっていた。空は、透き通った青色をしていた。

